

## 怨みを捨てる

実にこの世においては  
怨みに報いるに怨みを以てしたならば、  
ついに怨みの息むことがない。  
怨みを捨ててこそ息む。  
これは永遠の真理である

『ダンマバダ』（法句経）第五偈

まことに崇高な理念を説いた言葉です。

この言葉にまつわる私たち日本人にとって忘れてはならない出来事が、今から 60 年余りにありました。

それは 1951 年（昭和 26 年）9 月のことでした。

第二次世界大戦が終わり、アメリカの占領下にあった敗戦国日本の戦争責任と懲罰を議論する『フランシスコ対日講和会議』というものが開かれたのです。

戦勝国の間では、日本を米英中ソの四カ国で分割占領し、首都の東京は四カ国が共同占領するというような強硬な案も出されました。

そんな戦勝国主導の会議の席上、セイロン（現スリランカ）代表のジャヤワルデネ財務大臣（後にスリランカ第 2 代大統領）が、51 か国の代表を前に冒頭に紹介したお釈迦さまの言葉を引用して、自国の日本への賠償請求権を放棄すると宣言したのです。

（同様の趣旨でインド、ラオス、カンボジアなども賠償請求権を放棄しました）

さらに「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と、日本の分割論に真っ向から反対したのです。

このスピーチが諸外国代表の心を打ち、特に厳しい制裁措置を加えようとしていたソ連などの反対を押しきり、講話条約が締結され、日本の国際復帰への道が開かれたのです。

当時、日本国民はこのスピーチに大いに励まされ勇気づけられました。

我が国の戦後復興の第一歩が、このような仏教の理念が生かされた出来事から始まったということに深い感動を覚えます。

今日の私たちの豊かな生活や独立国家としての日本の繁栄は、スリランカなどの仏教徒の尊い行為なくしてはありえなかったのです。

怨みを捨てる……いざそれが自分の事となると、この言葉通りに実行することは至難の業です。しかも利害と利害がぶつかり合う国際政治の舞台ともなればなおさらのことです。

そのことを思うと、セイロンや他の諸国の方たちの英断には、ただただ頭が下がるばかりです。本条約締結後、日本が世界で一番早く外交関係を結んだのはスリランカでした。

なお、ジャヤワルデネ氏の功績をたたえた顕彰碑が鎌倉の大仏の境内地に建てられています。顕彰碑の裏面には講和会議の演説の全文、また表面には次の言葉が刻まれています。

『人はただ愛によってのみ憎しみを越えられる 人は憎しみによっては憎しみを越えられない』

我が国の戦後復興の大恩人であり、また大の親日家であったジャヤワルデネ氏は1996年9月、91歳で亡くなりました。

思えば私たち人間社会は損得、勝ち負けを軸に動いています。そのため、この社会から憎しみや怨みをなくすことは出来ません。一つの怨みが新たな怨みを生み、それが幾世を経ても尽きない、そんな人間の歴史を見る時、「怨みを捨てよ」と、はるか2500年の昔に語られたお釈迦さまのこの言葉は、まさに永遠の真理だと思います。

平成27年3月 「光明寺だより88号」